

謝 辞

心地よい春風にのって、ほのかな花の香りが漂う頃となりました。皆様の温かい祝福のもとに、沢山の思い出を築いてきた母校を卒業し、私たちは新たな道へ歩み始める日を迎えました。

先ほどいただきました、校長先生のお言葉、ご来賓の方々からの励ましのお言葉、在校生の皆様からのお別れのお言葉に、胸が熱くなる思いであります。

校長先生をはじめとする先生方のご指導、なでしこ会の先輩方のご支援、在校生の皆様の温かいお気持ちにより、このような卒業の良き日を迎えることができました。本当にありがとうございます。

二年前、三年前の春、満開の桜の下、夢や希望、不安を胸に抱きながら東京保育専門学校へ入学したのが、まるで昨日のように思い出されます。年齢や経験は様々でしたが「保育者になりたい」という熱い思いを持つ仲間と、ともに助け合い、励まし合い、互いの絆を深めて参りました。

入学して間もない頃に参加した伊豆・天城山荘での二泊三日の校外セミナーでは、「理想の保育者像」について意見を出し合い、話し合いを重ねていく中で、互いの想いや考え方を知りました。真っ直ぐな思いを語りながら、瞳を輝かせる友人たちを見て、同じ志を持つ仲間ができたことを嬉しく思いました。保育の道を志すという一点で心を繋ぐことができた大切な一瞬でした。

二日目のキャンドルファイヤーは大変に盛り上がり、一体感を感じることができ、いつしか「この仲間とともに学んでいきたい」と強く思うようになっていました。

保育の専門的な勉強は、非常にたくさんの科目があり、想像していた以上に大変でした。中でも五回の実習は、覚悟をしていたものの、試練の連続でした。はじめは一人一人の子どもの思いに寄り添うことが難しく、どうして泣いているのか、何を伝えたいのかわからず、悩みました。ですが毎日朝まで必死に書いていた、実習日誌を読み返し、振り返ることで子ども一人一人の思いに向き合うことができました。書くことで、気づきや学びを、より一層深めることに繋がっていたと感じ、実習日誌の大切さを改めて感じました。

実習から得た経験や学びは、保育者として歩み始める私たちにとって、かけがえのない宝物になりました。

実習園の子どもたちの輝く笑顔。聖心祭での子どもたちの弾ける笑顔。私たちの通学途中、道端にある河童の像の頭を、何気なく撫でている子どもの無邪気な笑顔。街で見かけるお母さんと過ごす喜びに満ちた笑顔。子どもたちのたくさんの笑顔を私たちは永遠に守りたいと思います。そして、守っていく氏名があります。

私たちは、明日より、学生から保育の専門家になります。小さな子どもたち命を預かり、人生に関わる責任と覚悟が必要になります。学校で勉強したことをしっかりと自分のものにし、保育者としての自覚を持ち、気を引き締めて、日々精進して参りたいと思います。

結びに、今日まで私たちが温かく見守り、ご指導くださいました先生方、支えてくださった皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。また、在校生の皆様も、素晴らしい保育者を目指して頑張ってください。将来ともに働けることを願っております。

母校の益々のご発展をお祈り申し上げまして、謝辞といたします。

平成三十年三月十四日
卒業生代表